

令和元年6月18日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K06685

研究課題名（和文）日本都市史の視覚的叙述に向けた基礎的研究

研究課題名（英文）Basic Research for Visual Description of Japanese Urban History

研究代表者

岩本 馨（Iwamoto, Kaoru）

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・准教授

研究者番号：00432419

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本都市史を「図」という視点から視覚的に叙述することを目指した共同研究である。期間は3年間で、初年度は史料・研究リストの作成と図化の方法論について議論し、図化の大方針を定めた。2年目は図のレイアウトと図化項目案についての検討を行った。そして最終年度である3年目には具体的な事例研究を行った。研究会では、日本近世・近代都市史の若手研究者を招いて報告をお願いし、都市空間の図化を具体的な事例をもとに議論した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、日本の都市空間の時代ごとの特質とその変遷、都市・地域の個性、都市間の関係のありようなどを視覚的に明らかにする点にある。視覚化の方法論を鍛えることは、都市史の分析をより具体的なものとするにもつながるし、また文章のみによる叙述に比べてより直観的表現となるがゆえに、専門分野や言語の壁を超えて、都市の歴史と将来ビジョンを議論する基盤を提供するという意義もある。

研究成果の概要（英文）：This research is a joint research aiming to visually describe Japanese urban history from the viewpoint of "figure". The period was three years, and in the first year, we discussed the methodology of drawing materials and research lists and plotting, and determined the plotting policy. In the second year, we examined the layout of the figure and the drafting items. And in the third year, which is the final year, we did a concrete case study. We invited young researchers from the early modern and modern urban history of Japan to request a presentation, and discussed the mapping of urban space based on concrete examples.

研究分野：都市史

キーワード：都市史 建築史 空間史 絵図 地図 視覚的叙述

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

日本の歴史的都市空間を図化してまとめた先駆的な成果として挙げられるのは高橋康夫らによる『図集日本都市史』（東京大学出版会、1993年）である。これは、当時の最新の研究成果をもとに、図と解説文によってヴィジュアルな日本都市史通史を描いたもので、都市史研究の基礎資料としてその後の研究進展にも大きく寄与してきた。しかしその刊行からはすでに22年が過ぎ、その間に生み出された豊富な研究成果の補訂もなされていないし、また近代・現代都市史の章を欠いているという重大な問題もある。一方、その後刊行された『都市史図集』（彰国社、1999年）では、現代までを射程に入れてはいるものの、全世界を対象としている関係で紙幅に限界があり、質・量ともに十分な内容とは言いがたい。そのほか、佐藤滋らによる『図説城下町都市』（鹿島出版会、2002年）は日本全国の城下町のプランを広く図化し、その設計手法を図示したものであるが、対象は城下町に限られ、通史的叙述は目的とされていない。そしてこれら現行の図集はいずれも日本語のみで記述されており、海外への発信は全く企図されていない。近年の都市史研究の学際化・国際化の流れをふまえるならば、古代から現代までの日本都市史研究の成果を国内外問わず広く共有できるような基礎資料としての図集を作成することは急務である。

また、図化の基礎となる絵図に関する研究としては、古くは矢守一彦『都市図の歴史』（講談社、1974年）などの先駆的成果があるが、近年はいつそうの進展をみせており、とくに杉本史子らによる『絵図学入門』（東京大学出版会、2011年）は、絵図の諸要素と類型、作製の技法、絵図活用の可能性までを総合的に検討した成果といえる。今後はここで挙げられた論点をふまえて、絵図からどのような情報を読み取り、何をどこまで図化するのかについて議論を深めることが重要となろう。

そのさいに援用されるべきは、土木史や歴史地理学の分野で進められてきたGIS研究である。この分野では近年、清水英範・布施孝志『再現江戸の景観』（鹿島出版会、2009年）、『京都の歴史GIS』（ナカニシヤ出版、2011年）、『歴史GISの地平』（勉誠出版、2012年）、『近世測量絵図のGIS分析』（古今書院、2014年）などの多くの成果が出され、歴史的絵図からの高精度な復元図作成の方法論や、GISを活用した歴史的都市空間の解析手法についての議論が蓄積されつつある。そこでの具体的な図化は未だ一部の都市にとどまっているが、今後はこれらの成果に学びながら、時代と対象を拡げ、共有可能な図集として公開していくことが求められる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の都市空間の時代ごとの特質とその変遷、都市・地域の個性、都市間の関係のありようなどを視覚的に明らかにし、通史として叙述するために必要な学術的知見を得ることである。そのために近年の絵図学・GIS（地理情報システム）研究の進展に学びつつ、図化の方法論を追究する。成果については、日英併記の図集としての刊行を視野に入れ、日本のみならず海外の学生・都市史研究者も利用可能とすることを目指した。

3. 研究の方法

本研究では研究開始時点では以下の4つの作業を想定していた。すなわち、(1) 日本の都市に関する基本的な絵図・地図史料およびそれらを活用した研究のリスト化、(2) 絵図・地図をもとにした復元図作成の方法論についての研究、(3) 都市史基本用語の英訳についての研究、(4) 以上の作業をふまえたうえで、古代から現代までを網羅した都市史図集の作成である。

一方で具体的な作業に取りかかってみると、上記『図集日本都市史』において基本的な図が作成されている前近代に対して、近年の研究の進展に比して「図化」に対する蓄積がほとんどない近現代について、何をどのように図化するのかの絞り込みに要する作業が膨大であることがしだいに明らかになってきた。また研究初年度に米国人日本都市史研究者を研究会に招き意見を求めたところ、中途半端な英語併記をするよりはまずは内容面の充実を優先すべきとの助言をいただいたこともあり、本研究では(1)と(2)を中心に進めることとなった。

4. 研究成果

近現代の図化が当初の想定よりも多くの作業が必要であることが明らかになったこともあり、本研究期間内では図集作成の具体的な作業までには至らなかったが、図化に対する基本的な方法論の形成と、具体的な図化項目のリストアップをまとめることができた。まず前者については、地理学との差別化を念頭に、絵図そのものを示すよりも空間の読み取り方、解釈のありようを示すことを主眼とし、その時代を代表する基本的な図を作成することと合わせて、都市の細部に着目し、その実態に迫る空間分析を行うという方針を固め、図化のパイロット版も作成した。後者については、古代15項目、中世25項目、近世25項目、近現代40項目を、図化すべき対象も含めてリスト化し、また複数の時代や都市にまたがる横断的テーマ13項目を設定した。3年目には具体的に4つのテーマについて、近世近代都市史の若手研究者を招いた研究会を開き、図化の方法論と空間分析を行った。

本研究期間内での代表的成果としては、まず都市史学会編『日本都市史・建築史事典』（丸善出版、2018年）が挙げられる。同書は古代から現代までの日本の都市史・建築史の基本的キーワードを文章として解説したもので、図化は指向しないものの都市史の通史的叙述という点では通底する。本書には岩本が編集委員として、岸・松山・初田が執筆者として参画している。

もう一つの代表的成果は、「都市の危機と再生」研究会編『危機の都市史—災害・人口減少と都市・建築』である。これは都市の危機というテーマについて、空間史（建築史）研究者が共同で執筆した論集であり、初田が取りまとめ役となり、岸と岩本が執筆者として参画している。この論集にも本研究会における、空間史の方法論についての議論が活かされている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計6件）

- (1) 初田香成「第二次世界大戦後日本の闇市に見る危機と復興」『歴史評論』第818号（2018年）、66-78頁
- (2) 初田香成「第二次世界大戦後日本の闇市に見る危機と復興」『歴史評論』第811号（2017年）、83-85頁
- (3) 初田香成・栢木まどか「無尽方式に起源をもつ「住宅無尽」・「月賦住宅」会社の系譜と供給手法の意義」『日本建築学会計画系論文集』第738号（2017年）、2071-2079頁
- (4) 高橋慎一郎・石井龍太・岩本馨・黒島敏「書評 高橋康夫著『海の「京都」：日本琉球都市史研究』」『都市史研究』第4号（2017年）、137-146頁
- (5) 岩本馨「幕府普請奉行役所による拝領武家屋敷の把握について—『屋敷渡預絵図証文』を中心に—」『都市史研究』第4号（2017年）、25-38頁
- (6) 松山恵「再考・東京市区改正—「現在」への影響—」『新都市』第70号（2016年）、63-67頁

〔学会発表〕（計5件）

- (1) Matsuyama Megumi, Edo/Tokyo and the Meiji Revolution, Japan Forum Workshop（招待講演）（国際学会）、2018
- (2) 岸泰子「寺町形成と近世都市京都の成立」、洛北史学例会、2018年
- (3) Nakamura Yuko and Hatsuda Kosei, Modern, Urban, and Ephemeral: Vernacular Architecture in Japan, The Society of Architectural Historians, 2017 Glasgow Conference, PS22 “The Global and the Local in Vernacular Architecture Studies”（国際学会）、2017
- (4) 初田香成「第二次世界大戦後日本の闇市に見る危機と復興」、歴史科学協議会（招待講演）、2017年
- (5) 岩本馨「『海の「京都」—日本琉球都市史研究—を読む」、都市史学会、2016年

〔図書〕（計11件）

- (1) 小野芳朗・岩本馨編『食がデザインする都市空間』（昭和堂、2019年）、全256頁
- (2) 「都市の危機と再生」研究会編、岩本馨・岸泰子・初田香成ほか執筆『危機の都市史—災害・人口減少と都市・建築』（吉川弘文館、2019年）、全406頁
- (3) 都市史学会編、岩本馨ほか編集委員、岩本馨・岸泰子・松山恵・初田香成ほか執筆『日本都市史・建築史事典』（丸善出版、2018年）、全688頁
- (4) 伊藤毅編、初田香成ほか執筆『フェーベトナム都城と建築』（中央公論美術出版、2018年）、全192頁
- (5) 初田香成・松山恵ほか執筆『東京大学が文京区になかったら』（NTT出版、2018年）、全214頁
- (6) 中川理編、松山恵ほか執筆『近代日本の空間編成史』（思文閣出版、2017年）、全548頁
- (7) 池享ほか編、初田香成・松山恵ほか執筆『みる・よむ・あるく東京の歴史3』（吉川弘文館、2017年）、全160頁
- (8) 高橋慎一郎・千葉敏之編、岩本馨ほか執筆『移動者の中世』（東京大学出版会、2017年）、全256頁
- (9) 並木誠士編、岩本馨ほか執筆『描かれた都市と建築』（昭和堂、2017年）、全256頁
- (10) 初田香成ほか『〈ヤミ市〉文化論』（ひつじ書房、2017年）、全321頁
- (11) 初田香成・田中傑・栢木まどか『震災復興期から戦災復興期にかけての住宅供給における住宅割賦販売会社の役割』（第一生命財団、2016年）、全73頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：岸泰子

ローマ字氏名：Kishi Yasuko

所属研究機関名：京都府立大学

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：60378817

研究分担者氏名：松山恵

ローマ字氏名：Matsuyama Megumi

所属研究機関名：明治大学

部局名：文学部

職名：専任准教授

研究者番号（8桁）：40401137

研究分担者氏名：初田香成

ローマ字氏名：Hatsuda Kosei

所属研究機関名：工学院大学

部局名：建築学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：70545780

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。